横田高校だんだんカンパニー

東京販売の成功も反省もすべてが成長のプロセス

年間の流れ

- **4月** 起業式
- **6月** 田植え体験 市場調査
- **7月** ブルーベリー収穫&ジャム製造 デザイン考案
- **8月** 販売価格決定 ポスター値札作成
- **9月** ハデ干し作業 デザイン完成
- **10月** 米梱包 東京販売
- **11月** 蔵市創業祭 販売
- **1月** 来年度への引き継ぎ

だんだんカンパニーとは？

だんだんカンパニーは平成23年に高校と地元企業、行政との連携事業としてスタートした。仮想会社として、会社設立、商品開発、販売、決算といった起業の模擬体験を通じて、地域資源の理解、新しい価値を創造する力を育成することを目指した取り組みである。このような取り組みは、専門高校等で実施されることが多く、製造機械や農地などの設備を持たない普通科高校では珍しい取り組みである。

商品の価値を学ぶ

だんだんカンパニーでは、設立当初からジャムを製造している。なぜジャムなのかというと、ジャムは収穫から製造、販売まで生徒たちが商品づくりの工程に関われるからである。

収穫作業は7月に八川農園で行っている。生徒は作業の最初にブルーベリーの味見をする。収穫をしたブルーベリーを洗わずに、そのまま口にすることができるのは農薬を使っていないからである。またジャムは、添加物を一切使わずてんさい糖だけで作っている。横田高校の手作りの無添加ジャムを、東京で楽しみに待っているお客様がいるのである。

東京販売に向けて試行錯誤

「ＰＯＰやポスターをつくって、どのようにすればお客様が注目してくれるのか、見やすいのかを考えながら取りかかりました。」しかし、東京販売を成功させるために準備したことが、実際の販売場面で、活きることもあれば、通用しないこともある。

東京販売のときにお客様から「これって無添加なの？」「糖度はどれくらいなの？」と聞かれる場面がある。生徒にとって、お客様に商品の良さを伝えるのは難しい。「てんさい糖のことや事前に準備してきたつもりだったけれど、もっと上手く説明できるように練習しておけば良かった」と後悔する生徒も少なくない。

また、最初は声を出すだけで、恥ずかしくてたまらなかった生徒も次第に大きな声が出るようになる。そして「ただ声を出すだけでは、人は止まってくれない。“島根”、“高校生がつくった”などキーワードを使って人を呼び込むと立ち止まってくれることに気がついた」と試行錯誤を繰り返しながら、成功体験を重ねて行く。普段教室では大人しい生徒が、販売の場面でスイッチが入り、お客様に積極的に声をかけるなど、周囲が驚くほどの活躍をするのである。

地域へ感謝の気持ち

生徒が考えた米のパッケージを見た農家の方が、「これはいい！わしらにはないアイディアだ！」ととても気に入ってくれた。田植えやハデ干し作業も農家の方が生徒を盛り上げてくださり、生徒もキャーキャー楽しそうに取り組んでいる。

田植えやハデ干しの準備作業、ジャムの製造指導やブルーベリーの保存に企業の冷蔵庫を借りるなど、地元企業や生産者のみなさまの協力がなければ実現できない授業である。「ブルーベリーの収穫をさせてもらった八川農園の橋本さんや、田んぼの持ち主の若槻さんもいつも私たちをあたたかく迎えてくれる。地域の方の協力があって、だんだんカンパニーの活動ができることに感謝したい」と生徒も話す。

今後に向けて

ジャム販売も6年目。仁多米販売も3年目となる。地域の方からは、「ジャム以外の商品もつくったらどうか」という意見や、生徒からも、「先輩がやっていない新しい取り組みをしたい」という意見も聞くようになった。

販売実績がない頃は、生徒も教員も、価格設定や販売見込みの数をどきどきしながら決定したが、近年は昨年のデータをもとに売上げの予測を立てられるようになった。以前と比べて、運営面ではスムーズにできるようになったが、生徒に「新しい価値を創造する力」を育成する為にはプログラムも新たなステージに挑まなければならない。

インタビュー

岸本　琢磨

田植えやハデ干し作業は小学校のときもやったことがありましたが、そのときとはまた違った気持ちで東京で販売することを意識しながら作業をしました。みんなで協力してやる大切さも改めて学ぶことができました。

萩塚　拓

ホッケーがしたくて県外から入学しましたが、だんだんカンパニーなどの授業もとても魅力的に思っています。東京販売では、声を出すのが大変で、伝えたい情報をシンプルに伝える難しさを知りました。貴重な体験ができてとても楽しかったです。

堀江　玲那

準備や販売など高校生ではなかなか体験できないことができました。東京販売は体力的にも大変でしたが、みんなで声をかけあって、完売を目指して最後まで笑顔で頑張ることができたのは良かったです。

地域学習の第一歩。１年生全員が学ぶ、課題解決学習「奥出雲学」

講義 ➡ フィールドワーク ➡ 企画づくり ➡ ポスター発表 ➡ 振り返り

自ら課題を発見し、解決する力を育む

これからの社会で求められる人材には自ら課題を見つけ、解決策を考える力が不可欠である。1年生の総合的な学習の時間「奥出雲学」は、生徒自らが課題を発見・解決する力を育む第一歩となる。

奥出雲学の流れは、最初に基調講演で観光文化協会のサミーラ事務局長に「地域に人を呼ぶ」というテーマの講演を聞く。その後班に分かれて、町内の企業や団体に取材に出かける。取材先は、奥出雲町子育て支援課や空き家活用、農業、道の駅、そば屋などさまざまである。

生徒は、町内で実際に行われている取り組みを参考にしながら、自分たちが地域を元気にする企画を考え、２月にポスター発表を行う。

企画づくりで大切にすることは、単なるアイディアではなく、地域のどのような課題を解決したいのか、高校生がどう関わるのか、といった視点を必ず取り入れることにしている。各班がどんなプロジェクトを発表するのか今から楽しみである。